

期の葉や花莖に白長毛を散生するのを常とするが、それに混じて時折全株無毛又は葉脚や葉柄頂に極く少量の毛を生ずるに過ぎぬ個體がある。此の形は Becker がシベリア (1915) とカムチャッカ (1928) とから別個に發表した無毛形に相當すると思はれる。Miquel が更に古く日本産のものに基いて無毛形を記して居るが、之は Becker が基準標本を検して別種のものと言つて居るのでそれに従つた。從來我が國では有毛形から區別して扱はれたことはないが、此處に品種として再認したい。併し有毛形も花期が過ぎれば往々にして全く無毛の葉を出すので注意を要する。

4) **アヒダ(間)ツクパネサウ** (新稱) 箱根神山のツクパネサウが一般に細葉形として表現されて居ることは興味あることと思ふが其の中に稀に花冠を持つ個體が見出される。無論葯隔は伸長して居ないから一見クルマバツクパネサウと分ち得るが、祖先返りの一種として一顧の價值があらう。各瓣は一脈を有し、基脚が互に連結して環状をなす様で、此の點は雄蕊圈に似て居る。

オイワタラとツチタラ (前川文夫) Fumio MAEKAWA: Possible affinity of Japanese vernacular names for *Aralia* and *Aruncus*.

ヤマブキショウマの羽越地域における方言イワタラと食用とについては本誌 21: 94 (昭 22) に書いたが語源については觸れなかつた。村松七郎氏は同じく本誌 7: (308) (昭 7) に石川理紀之助「救荒食圖解」を紹介して岩たりに觸れ岩上に生ずるタラノキの意としたが特に岩上とする程岩場に限つたものではないので釋然としなかつた。近日和名鈔にウドを指してツチタラ (豆知多良) というのを見て、はじめて氷解した。イワタラは古語が恐らくそのまま傳來したものでこのツチタラと對立して存在するものと思われウドが腐植の豊かな土 (最も土らしい土) に生ずるに反しイワタラはそれより遙かに岩礫のまじつた斜面に寧ろ多いから、その意味でイワに生ずるタラであろう。數回出の三出羽狀葉は極めて明瞭な共通特徴であり、共に若い芽と葉を食用にする。裏日本の北半は古語保存地域の一つである可能性を増したといえる。(東京大學理學部)